■企画展１関連講座

越後平野における古代の祭祀関連遺跡とその様相

相田泰臣（新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター）

はじめに

新潟市文化財センターの相田といいます。よろしくお願いいたします。私は後半ということで、新潟市を中心とした越後平野の古代の祭祀遺跡について、実際の遺跡の状況などを見ていきたいと考えております。

今回の講演会は、文化財センターで行っているのですが、企画展自体は秋葉区の古津八幡山遺跡という国の史跡の麓にある弥生の丘展示館というところで行っています。本来でしたら実際に展示品などを見ながら説明させていただくとより良かったのですが、向こうは講演場所がないということでこちらのほうでさせていただいております。

本日の講座の構成ですが、最初に越後平野における古墳時代の主な祭祀関連遺跡を見ていきたいと思います（スライド１）。そのあと２つ目に越後平野における飛鳥時代の祭祀関連遺跡を、３つ目に越後平野における奈良・平安時代の主な祭祀関連遺跡ということで、時代順に見ていきたいと考えております。

１．越後平野における古墳時代の主な祭祀関連遺跡

それでは最初に越後平野における古墳時代の主な祭祀関連遺跡を見ていきたいと思います。こちらの表ですけれど、これは新潟県内の主な古墳を地域別に並べた表でして、赤く塗ってあるのが竪穴系と呼ばれる埋葬施設を持つ古墳、白抜きが横穴系の埋葬施設で、古墳の横に入口があり通路を設けて奥に棺などを納める形態の古墳です（スライド３）。左端にはおおむねの年代が西暦で入れてあります。上から下に行くにつれて新しい年代になります。先ほど金田のほうからも説明がありましたけれど、一般的に古墳時代は西暦の300年より少し前くらいから600年くらいまでが該当します。また、古墳時代は古墳時代の前期・中期・後期と３時期に分けるのが一般的で、前期が西暦300年代くらい、中期が西暦400年代くらい、後期が西暦500年代くらいということになります。そのあと、西暦の600年より少し前くらいから飛鳥時代と呼んだりしますが、人によっては古墳時代の終末期と呼ぶ方もいます。表を見ていただいてもわかりますように、飛鳥時代に入ってもまだ古墳はつくられ続けておりますので、その古墳を重要視する研究者の方は古墳時代の終末期と呼んだりもするということになります。

新潟県もそうなのですが、飛鳥時代に入ると古墳はつくられ続けるのですが、前方後円墳と呼ばれる鍵の穴のような形の古墳は全国的につくられなくなります。新潟県でも古墳時代の後期、西暦500年代の半ばくらいにつくられたと考えられている前方後円墳の上越市菅原31号墳がつくられたのを最後に、それ以降の前方後円墳は見つかっていないということになります。ですので、飛鳥時代になると古墳はあるのですが前方後円墳はつくられなくなるという大きな変化があります。

次に古墳時代の祭祀関連遺跡について見ていきたいと思います。これは御井戸遺跡という遺跡で、旧巻町の角田山麓にある遺跡です（スライド４左）。この矢印のところに山谷古墳という前期古墳があり、その山谷古墳に関わる集落だろうと考えられています。

この写真の範囲から少し外れますが、右側には山へと向かう道路があり、真っすぐ行くとじょんのび館という施設があって、その先をさらに行き角田山を越えると日本海が広がっています。この御井戸遺跡で2002年に調査をした際、矢印のところになりますが、このように古墳時代の前期、ちょうど山谷古墳がつくられたのと同じくらいの時期のおびただしい数の土器が見つかっています（スライド４右）。

御井戸遺跡ですが、集落の中心はこの破線のところでして、この中で竪穴住居や掘立柱建物が見つかっています（スライド４左）。ちょうどその集落の中心部と古墳とを結ぶ位置で、このようなおびただしい数の土器が帯状に見つかったということで、集落から山谷古墳までの通路が存在し、その通路に沿って何らかの飲食行為を伴う祭祀行為をした痕跡ではないかと推測しています。

これは新潟市の北区にある葛塚遺跡でして、線刻

の人物画土器が出土しています(スライド５)。焼き物の外側はこのように赤く色を塗ってあり、絵が線刻で土器の外側に描かれていました。この線刻画については諸説あるのですが、腰に手を回していて、スカート状のような衣装を身に付け、顔が鳥のように見えるという意見があります(スライド６)。このような線刻土器が出ております。これは想像のイラストですけれど、このような鳥の衣装をまとって祭祀を行った可能性を示す資料になります（スライド７)。

あと先ほども出てきましたが前方後円墳の菖蒲塚古墳、古墳時代の前期の終わりくらいの時期の古墳になりますけれど、これが真上から撮った写真です(スライド８左)。ここに円丘があり、細長い長方形の高まりがついた前方後円の形をした古墳になります。この古墳からは副葬品としてこのようなヒスイの勾玉ですとか管玉が７点、そしてだ龍鏡と呼んでおります大型の鏡も出土しています（スライド８右)。ちなみに管玉の一部には鉄のサビが付着しており、鉄製品も一緒にあっただろうと考えられています。古墳の副葬品、埋葬施設で亡くなった方に添えたお供え物ですが、このだ龍鏡の分布を見ますと図の１番が菖蒲塚古墳になります(スライド９)。そして金田の話の中にも出てきましたが、２番の沖ノ島の祭祀遺跡ではこのだ龍鏡が祭祀具として使われております。菖蒲塚古墳は古墳時代前期の終わりくらいの時期の古墳ですけれど、そのくらいの時期には古墳の副葬品と祭祀具とで共通する場合が多かったということが、この菖蒲塚古墳のだ龍鏡からうかがえるということになります。

これは最近円筒埴輪が見つかった新潟市東区にある牡丹山諏訪神社古墳です(スライド10上)。菖蒲塚古墳よりも若干新しい時期、古墳時代の中期前半くらいの古墳ですけれど、管玉や土でつくられた土製の勾玉などが見つかっています（スライド10下)。

そしてまた御井戸遺跡ですけれど、先ほどは山谷古墳をつくった時期と同じくらいの土器が非常に多く出土していましたが、さらに時代が新しくなって牡丹山諏訪神社古墳よりも若干新しい時期、西暦の400年代の半ばから後半になりますと、金田の話の中にも出てきた石製模造品と呼ばれる石で剣や玉などを模造した品物が出土しています。石製模造品が出土した位置ですけれど、ここに谷があり、その谷の縁から石製模造品が見つかっています（スライド11)。これがその石製模造品ですが、鏡形や剣形、それと勾玉の形をした模造品が出土しています（スライド12)。古墳時代の中期という時期になると、このような石製模造品の祭祀具が出てくるということが新潟県でも確認できるということになります。ちなみにこれは想像のイラストですが、御井戸遺跡の石製模造品はいずれも穴があいているので、このように石の模造品を木に吊るして使用していたのかもしれません（スライド13)。

あと古墳時代の祭祀遺物では、阿賀野市の腰廻遺跡でもこういった石製模造品ですとか子持勾玉、土製の勾玉や鏡形の土製品、それと金田の話の中でも出てきましたけれど、ミニチュア土器や手づくね土器など土で簡単な模造をした土器などが見つかっています(スライド14)。これらは古墳時代の後期と呼んでいる時期が中心の資料になります。

２．越後平野における飛鳥時代の主な祭祀関連遺跡

続いて古墳時代のあとの飛鳥時代の主な祭祀関連遺跡について見ていきたいと思います。

飛鳥時代ですが、おおむね７世紀、600年代の時期となります。新潟市内はもとより新潟県内では遺跡数が少ない、遺跡があまり見つかっていない時期と言えます。新潟県では飛鳥時代の646年には渟足柵が、その翌年には磐舟柵がつくられたことが文献に記載されているなど非常に注目される時期ではありますが、県内においては遺跡数が非常に少ない時期となっています。その中で、秋葉区にある大沢谷内遺跡という遺跡、それと田上町になりますが行屋崎遺跡という遺跡で７世紀の半ば以降の遺構や遺物が見つかっています（スライド16・17)。

大沢谷内遺跡　こちらは大沢谷内遺跡の７世紀以降の土器を年代順に並べたものです（スライド18)。出土した土器などから遺跡の年代がわかるのですが、大沢谷内遺跡は一番古いものでは縄文時代の土器も見つかっています。そのあとはあまりはっきりしなくなり、７世紀後半から再びはっきりとしてくるというような遺跡であります。７世紀後半からまた再び集落が活発になり10世紀、平安時代まで続く遺跡になります。

これは飛鳥時代の資料で円面硯と呼ばれている丸い形の硯になります（スライド19左上)。こちらは九九木簡と呼ばれている、算数の九九を練習した木簡です(スライド19右)。このような硯や九九木簡などから非常に有力な人物がいた集落だろうと考えられております。他にも鉄づくりに関連する資料であ

る炉の中に空気を入れるためのフイゴの羽口や、紡錘車と呼んでいる糸をつむぐ道具なども見つかっています（スライド20左）。これらの資料からは、役所的な機能を持ち、官人、役人の存在が考えられます。

また、大沢谷内遺跡では木製品の未成品なども出ているので、木の加工なども行っていたんだろうと言われています（スライド21上）。

また、こちらは縄文時代の資料になりますけれど、この遺跡では縄文時代にアスファルトが非常に盛んに使われています（スライド22）。飛鳥時代に該当するアスファルトは今のところ見つかっていませんが、奈良・平安時代や鎌倉時代にもアスファルトを使用しているので、飛鳥時代にも縄文時代や奈良・平安時代と同じようにアスファルトを利用していたと考えています。

このような資料などから大沢谷内遺跡は役所的な遺跡と考えています。大沢谷内遺跡ではここに大きな谷がありまして、その谷の縁辺部で祭祀遺構、遺物が見つかっています（スライド23）。少し見づらくて申し訳ありませんが、上が７世紀後半、飛鳥時代後半の遺構の平面図で、下が８世紀代、奈良時代が中心となりますが、その時期の遺構の平面図です（スライド24）。遺跡の南側に先ほど写真で見ていただいた大きな谷があり、その谷の縁辺部、色が塗ってある範囲で祭祀関係の遺物が見つかっています。川辺の祭祀の痕跡です。

これはSX945という名称がついていますが、SXというのは性格が不明な遺構に対してつけられていて、そういったSX945という範囲の中でこのように祭祀遺物がまとまって出土しています（スライド25）。祭祀具を見ますと、先ほどの金田の話の中でもあった律令的祭祀具の１つである斎串が出土していたり（スライド26）、鏃形の木製品も見つかったりしています（スライド27）。

これらは須恵器の杯と呼んでいるお椀で、ほぼ完全な形で正位に置かれた状態で出土しました（スライド28下段）。こちらは高杯と呼んでいる脚のついたお椀ですが、その脚の部分だけが見つかっていて、上の部分を意図的に壊している可能性があります（スライド28中段左）。このように大沢谷内遺跡では祭祀の際に土器を使用していたようです。

また、同じようにこの谷の斜面から出た飛鳥時代の遺物ですけれど、真ん中に穴のある円盤形の土製品ですとか、先ほど出土状況の写真がありました鏃形の木製品や斎串、あとは舟形の木製品も出土しています（スライド29）。

これはSX945の土製有孔円盤と斎串の出土状況の図ですけれど、ある程度のまとまりを持って出土していることがわかります（スライド30）。土製の有孔円盤には穴があいているので何かを刺して使用したと推測されます。こちらが想像のイラストになります（スライド31）。

行屋崎遺跡　次に同じく７世紀後半の遺跡で、大沢谷内遺跡の近くにある田上町の行屋崎遺跡を見ていきます。この遺跡では調査区の南端に川跡があり、その川の縁辺部から非常に大量の木製品が出土しています（スライド32）。これはその調査風景です（スライド33）。スライドの左側が南で川跡となります。その川の縁辺部で大量の木製品などの遺物が出ています。これは弓の出土状況です（スライド34）。あと鈴も出土しています（スライド35）。

この表は古墳時代と飛鳥・奈良時代と奈良・平安時代というふうに、上から下に時代が新しくなりまして、どの遺跡でどの時期にどういった遺物が出ているのかを比較した表になります（スライド36）。小さくて申し訳ありませんが、黄色で囲ったところが大沢谷内遺跡で、紫色で囲ったところが行屋崎遺跡になります。沖ノ島の祭祀遺跡についても入れてあります。例えばここは石製模造品の列ですが、古墳時代にはそういった石の模造品が一定量出ていますが、飛鳥時代以降減少し、かわりに木を使った形代ですとか、そういったものが多くなるというようなことがこの表からわかります。

大沢谷内遺跡と行屋崎遺跡を比較してみると、どちらの遺跡でも木の斎串が見つかっています。金田の話の中で結界などの役割で使ったのではないかという話がありましたが、古代のいわゆる律令的な祭祀具を代表する斎串が見つかっているということで、ここ新潟にもその律令的な祭祀が７世紀後半にはすでに伝わっているということがうかがえます。また、どちらの遺跡でも刀形の木製品が見つかっております。

このように共通する遺物がある一方で、大沢谷内遺跡では鉄の鏃や刀子が見つかっているのに対し、行屋崎遺跡ではそれらは出ておらず、先ほど見ていただいた銅製の鈴や耳飾りである銅製の耳環が見つかっているといった違いがあります。

あと土製品ですが、行屋崎遺跡では手づくね土器が見つかっていたり、また金田の話の最後のほうでも話がありました人形や動物形の土製の模造品など

も見つかっております。それに対し、大沢谷内遺跡では先ほど想像イラストもありましたが円盤形の土製品が見つかっているといった違いも見られます。

以上をまとめると、共通するものとしては斎串や刀形の木製品、また弓などがどちらの遺跡でも見つかっているということです(スライド37)。繰り返しになりますが、斎串については飛鳥時代から新たに加わった律令的な祭祀遺物であり、いわゆる律令祭祀が地方へも急速に伝わった状況を示す資料と言えます。

異なるものとしては、表で確認したように土製品ですと、大沢谷内遺跡で有孔円盤が見つかっているのに対して、行屋崎遺跡では人形の土製品だとか、動物形の土製品だとか、あと手づくね土器などが見つかっているという違いがあります。さらに金属製品では、大沢谷内遺跡では鉄鏃とか刀子が見つかっているのに対して、行屋崎遺跡では銅製の鈴や耳環が見つかっているといった違いもあります。

行屋崎遺跡も大沢谷内遺跡も同じ７世紀後半の遺跡で、距離も1.5kmほどしか離れていないのですが、このような祭祀関連資料の違いというのは、遺跡の性格によるものなのか、あるいは７世紀後半の中の微妙な時期差によるものなのかということも今後検討していく必要があるのかなと思います。

３．越後平野における奈良・平安時代の主な祭祀関連遺跡

次に奈良・平安時代の主な祭祀関連遺跡について見ていきたいと思います。

まずは新潟市の西区にある的場遺跡と緒立遺跡について見ていきたいと思います（スライド39・40)。これは1976年に撮影された的場遺跡と緒立遺跡の遠景です(スライド41)。的場遺跡も緒立遺跡も調査で遺構を確認できた標高が－４ｍという非常に低い立地にあります。地盤沈下の影響によるものですが、もともと低湿な場所の中の若干高い土地を利用して集落が営まれていたと考えられます。

的場遺跡　こちらは1989年に撮影した的場遺跡の調査風景です（スライド42)。左側が高い場所で、低い方へ行くと低湿な環境にあるという状況がわかります。的場遺跡では木の沓が出ていたり（スライド43)、鈴や太刀につける金具が出ていたりと、非常に有力な役人がいたと考えられています。これが太刀金具の出土状況です（スライド44)。また、帯金具と呼んでいるベルトの金具が出ていたりですとか、先ほどの木沓、それと琴柱と呼ぶ木製の琴の道具ですとか、あと独楽なども見つかっていて、一般集落ではなかなか見られない資料が出土しています（スライド45)。

的場遺跡では他にも魚を捕るときのおもりに使った大小の土錘（スライド46）ですとか、木製の浮き（スライド47左上）なども見つかっており、魚をとっていたことがわかります。的場遺跡で出土した木簡の中に「枚人鮭」と記された木簡（スライド47右）があることや、またサケの骨（スライド47左下）が出土していることなどから、サケを中心に漁撈活動をしていた集落で、役人が関与していた役所関連施設であると考えられている遺跡です。

その的場遺跡ですが、北や西側の湿地部分から祭祀関連の遺物が見つかっています(スライド48)。これは木製品の出土状況です(スライド49)。これは木の形代で、人の形をした形代が出土している状況です(スライド50)。これは的場遺跡から出土した木製祭祀具の一部です(スライド51)。左側は人の形をした形代で、右側は災いを払いのける結界のような役割だったのではないかと言われている斎串になります。

また、金田の話にもありました馬形の木製品も出土しています(スライド52上２つ)。これは中央に鞍が表現されていて馬だろうと考えられています。また、舟の形をした木製品も湿地から出土しています(スライド52下)。金田の話にもありましたが、水に流して使ったのではないかと考えられています。

他に、水辺ではありませんが掘立柱建物の柱の穴の中からこのように和同開珎が20枚束になった状態で見つかっています(スライド53)。これは建物の地鎮に関係する可能性が指摘されていますが、そのような祭祀も行われていたようです。

緒立遺跡　次に緒立遺跡を見ていきたいと思いますが、的場遺跡と緒立遺跡は直線で500～600ｍと非常に近い位置関係にあり、互いを補完し合うような関係であったと考えられています（スライド54)。

これは緒立遺跡の調査風景です(スライド55)。こちらも的場遺跡同様、標高の低い低湿地の中の高い土地を使って営まれた集落です。

緒立遺跡では、先ほどの金田の話の中でカマドの模造品という言葉がありましたが、このようなカマドの形をした土製品が見つかっています（スライド56)。

この緒立遺跡は調査区の北側で低湿地が確認され

ていて、調査区中央から南側では掘立柱建物などが見つかっています(スライド57)。この中の黒い点が杭列で柵と考えられます。青く塗ってあるのは斎串が出土した場所です。あとこの黄色い四角は人面墨書土器が出土した場所になります。こういった集落の縁辺部から湿地に至る場所で人面墨書土器が出土しております。いずれも水辺の祭祀に伴う資料と考えられています。

これが緒立遺跡の人面墨書土器です（スライド58)。先ほどの金田の話にもありましたが、顔を土器に描き、それを水に流すことで穢れなどを祓ったと考えられている遺物になります。

こちらは胎内市の船戸桜田遺跡の人面墨書土器です(スライド59)。ひげが描いてあります。これはその展開写真です（スライド60下)。同じ土器に４面、４つの顔が描かれています。新潟県内の人面墨書土器はこの緒立遺跡と船戸桜田遺跡、それと長岡市の浦反甫東遺跡という遺跡でも、破片資料ですが目ではないかと言われている人面墨書の可能性のある土器が出ています(スライド60右上)。県内ではこの３遺跡で人面墨書土器が見つかっているという状況です。

これは緒立遺跡での水辺の祭祀風景の想像イラストです（スライド61)。後ろに柵列があり、カマド形の土製品があり、カマド形の土製品は実際に煮炊きをしたのか、置いて真似だけしたのか、なかなかわかりませんけれど、あとは人面墨書土器や斎串を水辺に流したのではないかということです。

山形県の俵田遺跡という遺跡では、人面墨書土器や馬形の木製形代、人形の形代などが出土しており、おおむね使用した痕跡を残す出土状況なのではないかということで使用時の復元案が示されています(スライド62)。人面墨書土器などは水辺の縁の部分で見つかっていますが、人面墨書土器の中に人形などを封じ入れ、さらに周りを斎串などで結界をし、馬形の木製品と一緒に穢れなどを水に流して祓ったのではないのかと考えられています。

以上、緒立遺跡と的場遺跡を中心に祭祀の様相について見てきましたが、どちらも水辺の周辺で斎串や人形、舟形、馬形、刀形など多くの形代が出土しており、災いや穢れなどを木の形代に移して水に流す儀礼を行ったと推測されます。人面墨書土器は先ほどお話ししたように、県内では緒立遺跡など３遺跡で出土しています。緒立遺跡や的場遺跡ではそういった祭祀具と一緒に琴柱や独楽、鈴、またサイコロなども見つかっており、場合によってはそういった道具は祭祀の際のまじないなどに使用した可能性もあるのではないかと考えられています。

井戸の祭祀　井戸に伴う祭祀も行われていたようで、これは秋葉区にある大沢谷内遺跡の井戸の断面です（スライド64)。この井戸ですが、丸木舟を井戸の側板として再利用していました。その井戸の下からほぼ完全な形の土器が見つかっています。これがその井戸の底から見つかった須恵器のお椀が出土した状況です(スライド65)。壊れていない状態で２つ出土しています。これは井戸の祭祀に伴うものだろうと考えております。

これは別の井戸になりますが、これも丸木舟を井戸の側板として再利用していた井戸です（スライド66)。この井戸の底からも、少し割れてしまっていますが、須恵器のお椀が出土しています(スライド67)。

この表は、大沢谷内遺跡における奈良時代と平安時代の井戸の大きさと深さを示した表です（スライド68)。横軸が井戸の幅で、縦軸が深さを示しています。右に行くほど径が大きく、上に行くほど深い井戸ということになります。表の中で赤く塗っていて少し記号の大きいものが、底から残りの良い土器が出土した井戸です。また三角や四角の記号のものは、先ほど写真で見ましたが、井戸の側面を木材で囲っている井戸です。比較的径が大きく深い井戸において側面を木材で囲っていることが分かるとともに、そういった径が大きくて深い井戸の底から残りの良い土器が出土している傾向がうかがえます。これらの事からは、全ての井戸で祭祀を行ったのではなくて、集落の中で核となる特別な井戸に限って祭祀行為を行っていたことが推測できるかと思います。

井戸の祭祀についてまとめますが、井戸での祭祀事例については古くは弥生時代から確認されており、弥生時代にも井戸の底から完全な形の土器が出土する事例があります(スライド69)。これらは水や水脈をもつその土地に対する畏敬の表れだろうと考えられます。現代でも井戸を掘ったり廃棄する際にお祓いをすることがありますが、そういった祭祀行為は弥生時代から見られるということになります。

７世紀後半以降になると、土器に加えていわゆる律令的祭祀具である斎串や形代などの祭祀遺物が井戸の中から出土する例が多くなります。

大沢谷内遺跡における井戸の事例からは、繰り返しになりますが、規模の比較的大きな特定の井戸でのみ、完形土器を用いた井戸祭祀が行われていたと

いうことが言えるかと思います。

おわりに

以上、越後平野における古代祭祀遺跡について幾つか見てきましたが、それらについて若干の比較を行いたいと思います(スライド71)。緒立遺跡と的場遺跡は、どちらも８・９世紀、奈良時代・平安時代の公的な機能をもった遺跡で、サケなどの漁撈活動を行っていたと考えられています。

人面墨書土器や手づくね土器、カマド形土製品、また各種形代や大量の斎串などの祭祀遺物が出土しており、水辺において公的な祭祀が行われていたことが推測されています。

スライドには出てきませんでしたが、新潟市西区の赤塚にある四十石遺跡は８・９世紀の遺跡で、倉庫群や帯金具､｢津」と書かれた墨書土器が見つかっていることなどから、公的機関が管理した港と考えられている遺跡です。四十石遺跡は緒立遺跡や的場遺跡と同じ時期の遺跡ですが、こちらでは明確な祭祀遺物や祭祀を行った痕跡は確認されていません。

また、胎内市にある蔵ノ坪遺跡では「少目」と書かれた荷札木簡が出ています。金田の話の中でも出てきたように「少目」は国司の名称で、蔵ノ坪遺跡周辺に国司がいたのではないかという研究者もいます。その「少目」と書かれた荷札木簡や、四十石遺跡と同じく「津」と書かれた墨書土器などが出土していることなどから、８・９世紀の公的機関が関与した港と考えられている遺跡です。ただし、こちらも四十石遺跡と同様、明確な祭祀遺物や祭祀を行った痕跡は確認できていません。

以上のことからは、同じ時代であっても遺跡によって出土遺物が異なる場合のあることがうかがえ、遺跡の機能や役割によって、出土する祭祀具の種類や多寡、祭祀のあり方などが異なっていた可能性が推測されます。

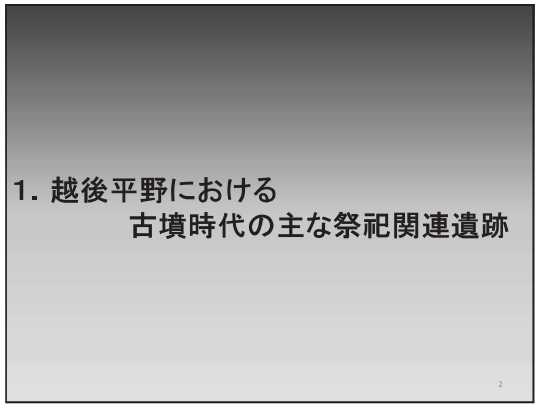
祭祀にはいろいろな種類のものがあり、国家レベルのものや地方の役所レベルのもの、あるいは農民が雨乞いをしたり、井戸を埋めたりする際に行うものなど、さまざまな祭祀があったことが推測されます（スライド72)。また祭祀具についても､石製模造品など祭祀専用のものもあれば、日常使用しているものを祭祀に使用する場合もあります。井戸の祭祀のところで見た井戸底で出土した完形の土器などは、通常、食事の際に使用したものですが、井戸底から完形で出土した状況から祭祀遺物と判断されたということになります。

祭祀遺物の認定や、祭祀遺物の出土がどのような背景で行われた祭祀行為を反映したものかなど、まだ不明な点が多いのが実情で、今後検討していかなければいけませんが、先ほど確認したように、同じ時期の公的な遺跡であっても祭祀遺物の種類や出土量などに違いが見られるなど、非常に多様な祭祀のあり方が認められ、さまざまな要因によって祭祀のあり方が異なっていたことが推測されます。今回は公的な遺跡を中心に見てきましたが、そうではない一般集落の遺跡も含めてその違いや背景などについて今後検討していく必要があるといえます。

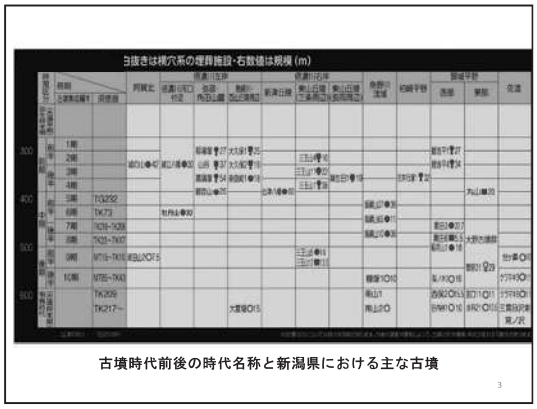
また、最初に古墳時代から飛鳥時代の遺跡について話をしました。７世紀後半では大沢谷内遺跡と行屋崎遺跡の事例を紹介しましたが､越後平野では６・７世紀の遺跡が少ない状況です。大沢谷内遺跡などの７世紀後半の遺跡も少ないのですが、特に６世紀後半から７世紀前半の遺跡が非常に少ない状況であり、そのため古墳時代の祭祀から古代のいわゆる律令祭祀へと至る過程の実態についても不明な点が多いといえます。

今後の検討課題が多く、なかなか結論めいたことは言えませんでしたが、以上で終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。

スライド 1



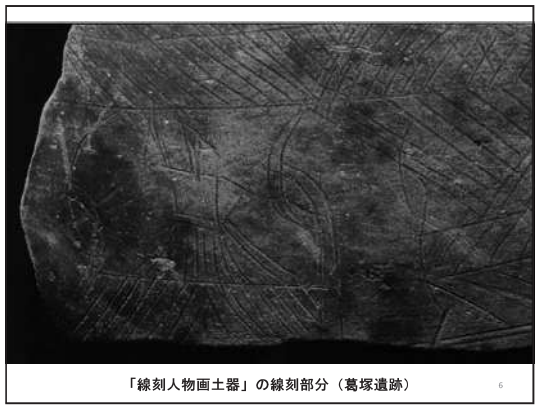
スライド 2



スライド 3

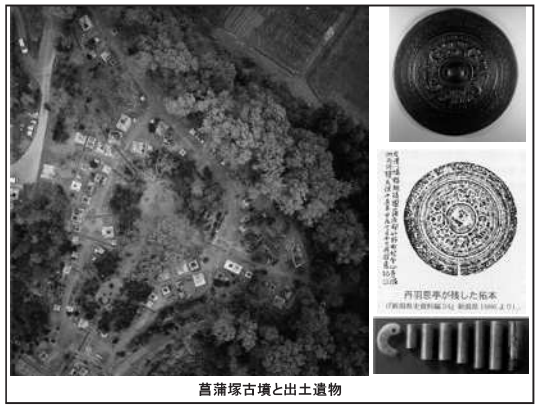
スライド 4

スライド 5

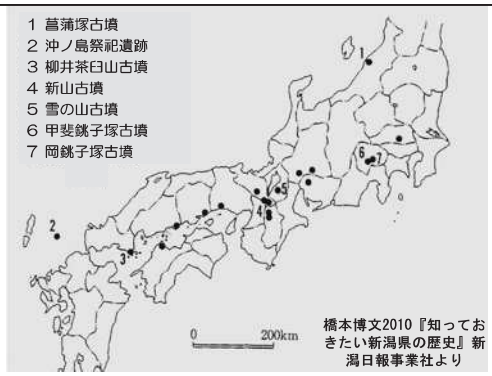


スライド 6

スライド 7



スライド 8



鼉龍鏡の分布

9

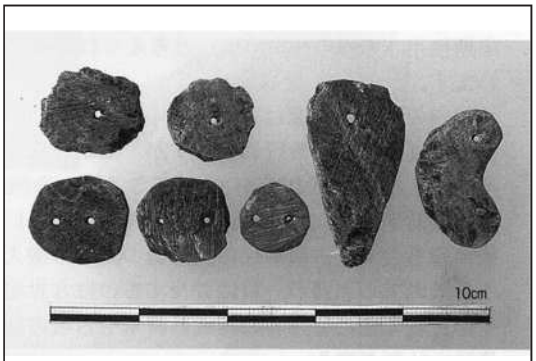
スライド 9

牡丹山諏訪神社古墳（東区）

スライド10

御井戸遺跡遠景

スライド11



御井戸遺跡出土の石製模造品

12

スライド12

御井戸遺跡における石製模造品を使った祭祀風景想像イラスト

13

スライド13

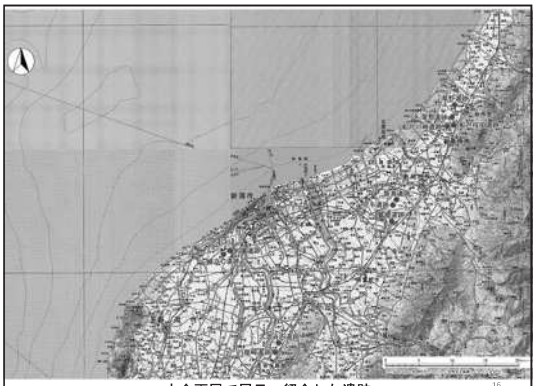
阿賀野市腰廻遺跡出土の古墳時代の祭祀遺物

スライド14

2. 越後平野における
飛鳥時代の主な祭祀関連遺跡

15

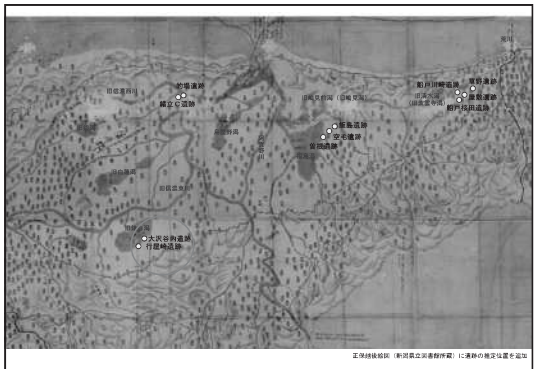
スライド15



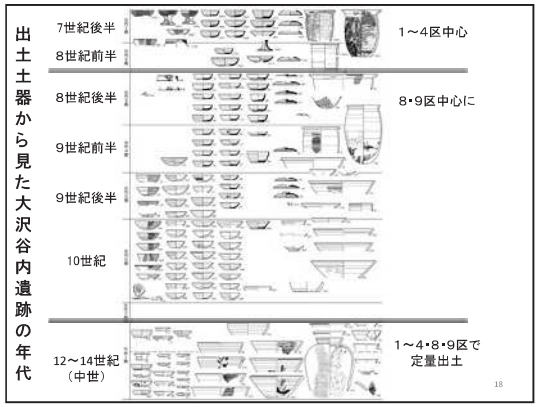
本企画展で展示・紹介した遺跡

16

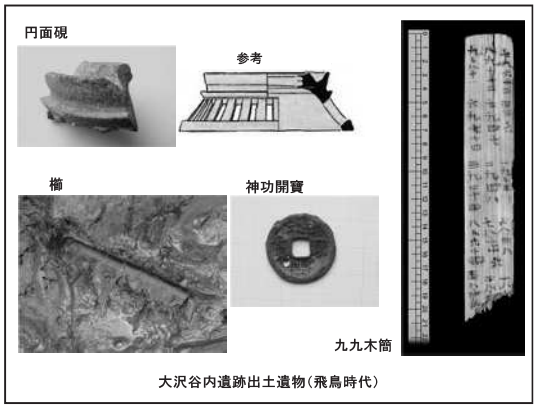
スライド16



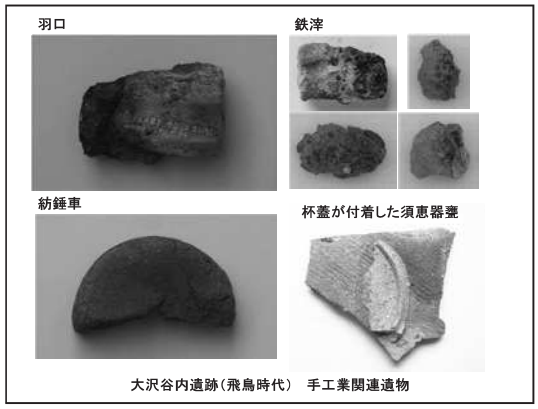
スライド17



スライド18

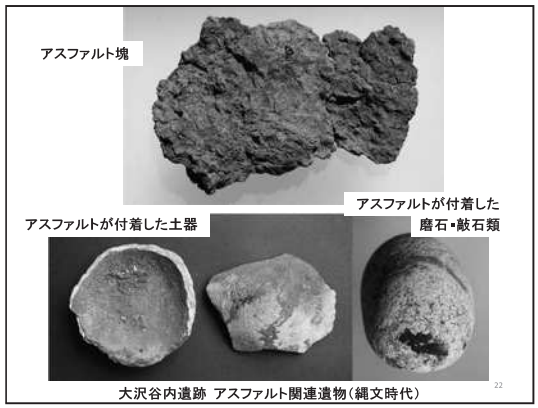


スライド19



スライド20

スライド21



スライド22

スライド23

スライド24

大沢谷内遺跡遺物出土状況（SX945）

スライド25

大沢谷内遺跡斎串出土状況（SX945）

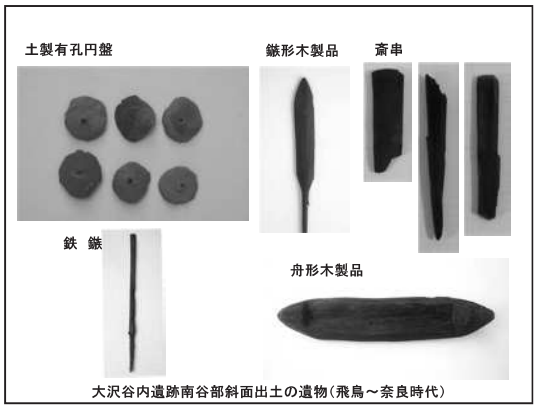
スライド26

大沢谷内遺跡鏃形木製品出土状況（SX951）

スライド27

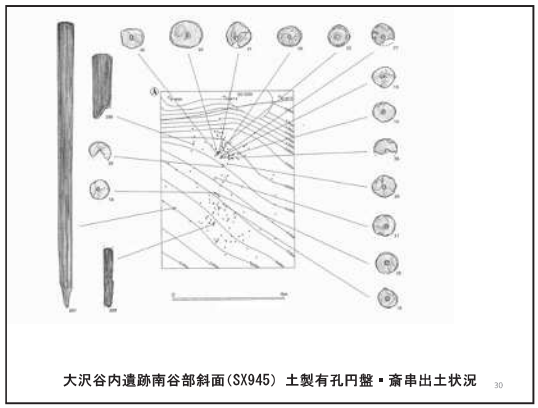
大沢谷内遺跡南谷部斜面（SX945）出土の土器（飛鳥時代）

スライド28



大沢谷内遺跡南谷部斜面出土の遺物（飛鳥～奈良時代）

スライド29

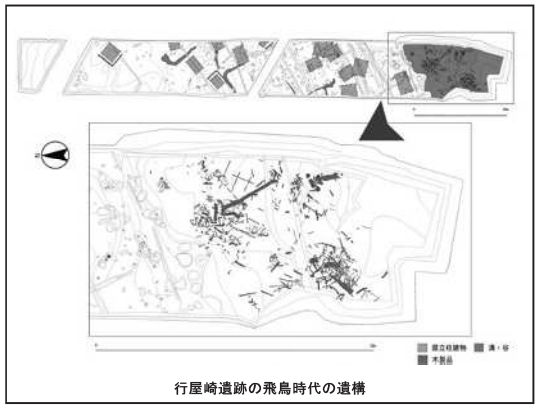


大沢谷内遺跡南谷部斜面（SX945） 土製有孔円盤・斎串出土状況

スライド30

大沢谷内遺跡の祭祀風景想像イラスト

スライド31



行屋崎遺跡の飛鳥時代の遺構

スライド32

行屋崎遺跡流路（SR400）の調査風景　33　田上町教育委員会提供

スライド33

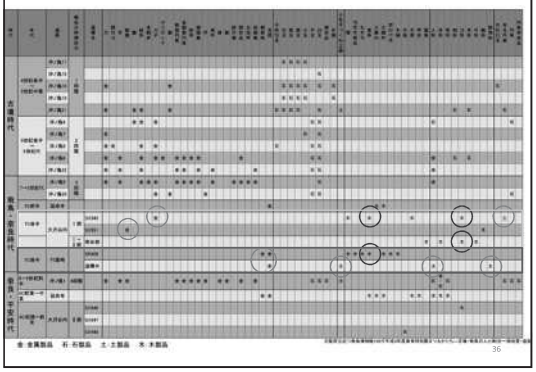
行屋崎遺跡弓出土状況　34　田上町教育委員会提供

スライド34

行屋崎遺跡鈴出土状況　35　田上町教育委員会提供

スライド35

沖ノ島と行屋崎遺跡・大沢谷内遺跡・延命寺遺跡（上越市）におけるおもな祭祀遺物



金：金属製品　石：石製品　土：土製品　木：木製品　36

スライド36

行屋崎遺跡・大沢谷内遺跡出土の祭祀関係遺物の比較

①共通するもの
- 斎串
- 刀形木製品
- 弓

斎串 ⇒ 飛鳥時代に新たに加わった律令的祭祀遺物。
律令祭祀が地方へも急速に伝わった状況を示す。

②異なるもの
- 土製品
  土製有孔円盤（大沢谷内遺跡）
  人形土製品・動物形土製品、手づくね土器（行屋崎遺跡）
- 金属製品
  鉄鏃・刀子（大沢谷内遺跡）
  銅製鈴・耳環（行屋崎遺跡）

◆祭祀遺物の違い⇒遺跡の性格によるものなのか、あるいは7世紀後半の中の時期差によるものなのか、今後検討していく必要あり。

37

スライド37

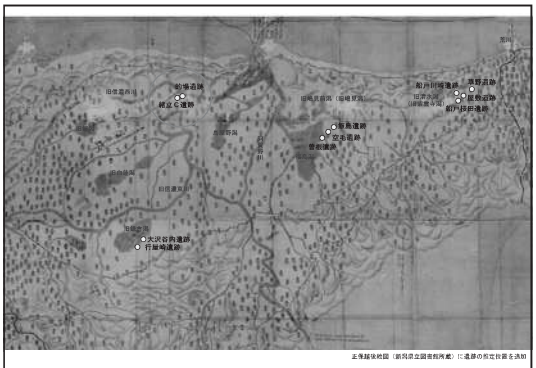
3. 越後平野における奈良・平安時代の主な祭祀関連遺跡

38

スライド38

本企画展で展示・紹介した遺跡　39

スライド39



本企画展で展示・紹介した遺跡　40

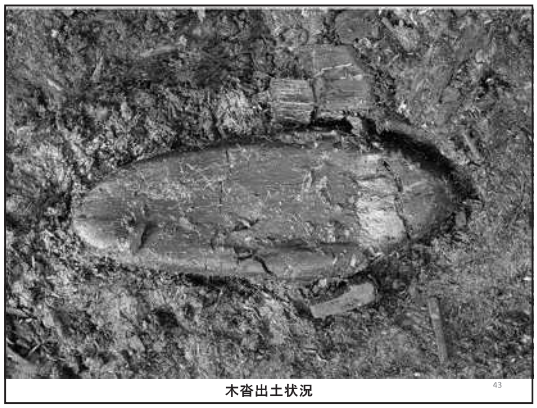
スライド40

的場遺跡・緒立遺跡遠景（1976年頃撮影）

スライド41

的場遺跡調査風景（1989年撮影）

スライド42



木沓出土状況

スライド43

太刀金具出土状況

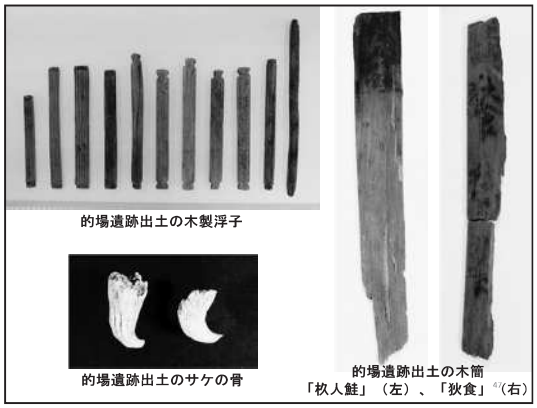
スライド44

的場遺跡出土の金属製品・木製品

スライド45

的場遺跡から出土した土錘

スライド46

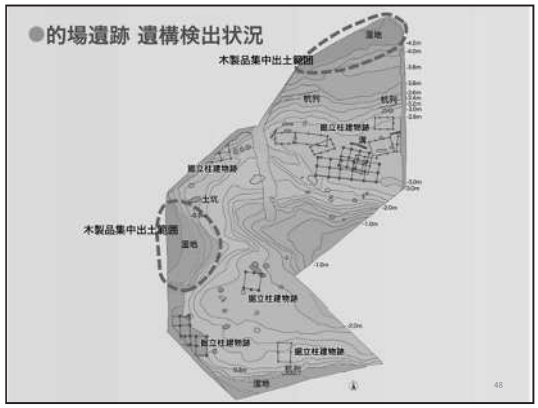


的場遺跡出土の木製浮子

的場遺跡出土のサケの骨

的場遺跡出土の木簡
「枚人鮭」（左）、「狄食」（右）

スライド47



スライド48

的場遺跡の木製品出土状況 49

スライド49

形代（人形木製品）出土状況 50

スライド50

的場遺跡出土の木製祭祀具（人形・斎串） 51

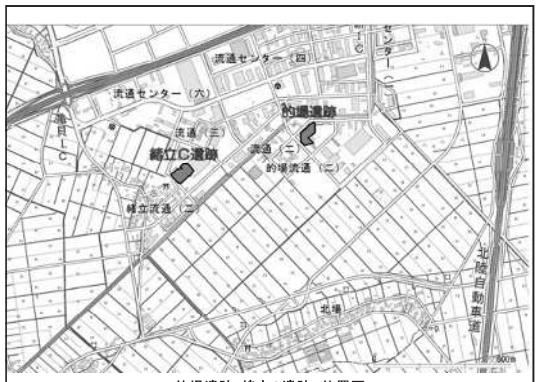
スライド51

的場遺跡出土の木製祭祀具（馬形・舟形） 52

スライド52

和同開珎出土状況（的場遺跡） 53

スライド53



的場遺跡・緒立C遺跡　位置図 54

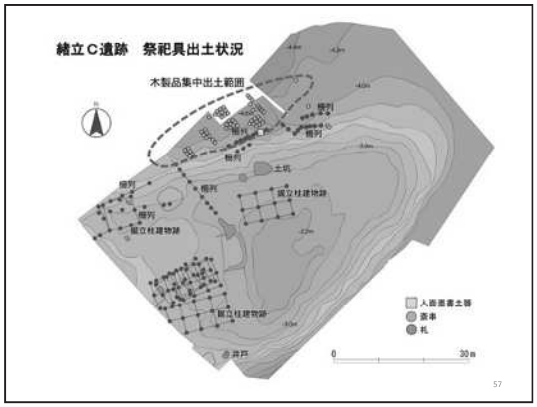
スライド54

緒立C遺跡の調査風景 55

スライド55

緒立C遺跡出土のカマド形土製品（上）・推定復元イラスト（下） 56

スライド56



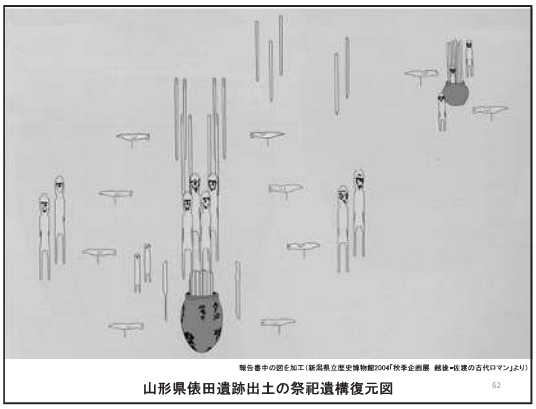
スライド57

スライド58

スライド59

スライド60

スライド61



スライド62

緒立遺跡・的場遺跡の祭祀の様相

●水辺周辺で斎串や人形・舟形・馬形・刀形など多くの形代が出土

⇒災いや穢れなどを木の形代に移して水に流す儀礼を行ったと推測される
人面墨書土器：緒立C遺跡など3遺跡で出土

●木製の琴柱や、的場遺跡出土の独楽や鈴 、緒立C遺跡出土のサイコロは斎串や形代と一緒に出土

⇒祭祀の際のまじないなどに使用した可能性

●的場遺跡では、掘立柱建物の柱の穴から和同開珎20枚が重なった状態で出土。貨幣の一部には布の付着が認められる。

⇒布に包まれた状態で埋納された可能性あり。
建物をつくる前の地鎮祭祀？

63

スライド63

スライド64

大沢谷内遺跡の井戸（SE2383）底から出土した土器 65

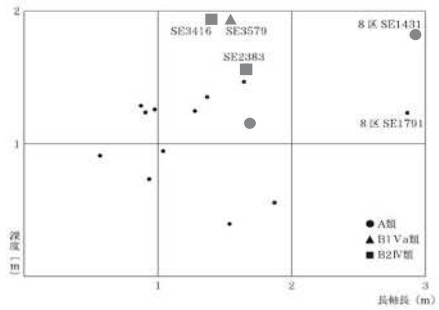
スライド65

大沢谷内遺跡の井戸（SE3416）の断面 66

スライド66

大沢谷内遺跡の井戸（SE3416）底から出土した完形土器 67

スライド67



大沢谷内遺跡の井戸の長軸長・深度
（赤塗りは完形土器出土井戸） 68

スライド68

井戸の祭祀

●古くは弥生時代
・・・井戸底から完全な形の土器が出土する事例あり
⇒水または水脈をもつ土地に対する畏敬の表れか

●飛鳥時代の7世紀後半以降
・・・土器に加えて斎串や形代などの祭祀遺物の出土も多くなる

☆大沢谷内遺跡における奈良・平安時代の井戸の事例
・・・20基のうち5基で井戸底から完形土器が出土
完形土器が出土した井戸は、他よりも幅が大きくかつ深い井戸
そのうち2基は井戸側を木で囲うなどの特別なつくりの井戸（丸木舟の転用など）

⇒奈良・平安時代の大沢谷内遺跡では、規模の比較的大きな特定の井戸でのみ完形土器を用いた井戸祭祀が行われていた 69

スライド69

4. まとめ

70

スライド70

越後平野における古代祭祀遺跡の比較

緒立遺跡・的場遺跡（新潟市西区）の性格
・8・9世紀の公的機関が関与する流通漁業基地
・人面墨書土器や手づくね土器、カマド形土製品
・各種形代や多量の斎串などの祭祀遺物が出土

⇒水辺において公的な祭祀が行われた

四十石遺跡（新潟市西区）の性格
・8・9世紀の倉庫群や帯金具
・「津」と書かれた墨書土器
・8・9世紀の公的機関が管理する港
・明確な祭祀遺物や祭祀を行った痕跡は未確認

蔵ノ坪遺跡（胎内市）の性格
・「少目」と書かれた荷札木簡
・「津」と書かれた墨書土器
・8・9世紀の公的機関が管理する港
・明確な祭祀遺物や祭祀を行った痕跡は未確認

◆同じ公的機関が関与する遺跡であっても、その遺跡の機能や役割によって、使用する祭祀具の種類や多寡、祭祀のあり方などが異なっていた可能性 71

スライド71

おわりに

●祭祀
・国家レベルのもの
・国司や郡司といった地方の役所レベルのもの
・農民が雨乞いや井戸を埋めたりする際に行うもの　などさまざまな祭祀あり

●祭祀具
・祭祀専用のもの
・日常使用しているもので、祭祀を行う時にも利用したもの

◆同じ時期の公的な遺跡であっても、祭祀遺物の種類や多寡に違いが見られ、遺跡の役割や機能、そのほか様々な要因によって、祭祀のあり方が異なっていた

◆一般集落の遺跡も含め、祭祀遺物や祭祀のあり方は多様であり、その背景については今後の大きな検討課題

◆6世紀後半から7世紀前半の遺跡が越後平野では少ないこともあり、古墳時代から古代への過渡期における祭祀具の変遷や祭祀の実態の解明についても今後の検討課題 72

スライド72

図・写真の出典

スライド１、12、31、61：画　野崎裕美氏
スライド３：新潟市文化財センター2013『弥生の丘展示館ガイドブック№３（古墳・奈良・平安時代編）』
スライド７：画　早川和子氏
スライド８右中央：新潟県1986『新潟県史』資料編24
スライド９：橋本博文2010「新事実から読み直す新潟の前期古墳」『知っておきたい新潟県の歴史』新潟日報事業社
スライド17、40：正保越後絵図（新潟県立図書館所蔵）に遺跡位置を追加
スライド24、30：新潟市教育委員会2012『大沢谷内遺跡』Ⅱから作成
スライド32：田上町教育委員会2015『行屋崎遺跡』から作成
スライド33、34、35下：田上町教育委員会提供
スライド33右上：新潟県教育委員会2008『延命寺遺跡』
スライド58左、右：黒埼町教育委員会1994『緒立Ｃ遺跡発掘調査報告書』
スライド59：中条町教育委員会2001『船戸桜田遺跡　２次』
スライド60下、62：新潟県立歴史博物館2004『平成16年度秋季企画展　越後・佐渡の古代ロマン』